

# 遠隔高等教育における 教育・学習方法の研究(II)

— 開学初期の放送大学の学生にみる  
学習環境・学習方法と達成率 —

若松 茂・田代和久

## Studies on Teaching and Learning Method at a Distance II

— Effect of Learning Behavior with Broadcast TV Lectures on  
Student Success Rate as Observed during the Early Stages  
of the University of the Air —

Shigeru Wakamatsu & Kazuhisa Tashiro

### Abstract

The University of the Air is a new university, characterized by the broadcasting of lectures through its own radio and television broadcasting facilities.

The investigation is mainly concerned with student behavior in learning from broadcast lectures.

As a result of personal interviews with more than one hundred students at various study centers of the University, it has been found that students who watched TV lectures "on time" (i.e. at their regularly scheduled broadcast time) had a high rate of successfully passing courses and getting credit for them. The "On Time TV Watching" is thought to be effective on motivating or pace making for student to learn at a distance.

### キーワード

遠隔教育 教育メディア 放送教材 印刷教材 放送大学

### 〈はじめに〉

放送大学は、正規の大学卒業資格を認定するという点では、既成の大学と本質的な差はなく、資格認定制度や、職業上の技術の修得を直接の目的とせず、生涯を通じて幅広い教養と自己啓発をめざす点においては、各種の生涯教育機関や、カルチャーセンターと共通する機能をにない、学習者と教師とが物理的に分離し、メディアを通じて学習者が遠隔地で学習するという形態においては、わが国の私大通信制をはじめとする、世界の遠隔高等

教育機関と軌を一にするものである。

放送大学が、このように既存の機関や制度と共通の側面を持ちながら、同時にこれらのどれ一つとも同一でないのは、放送大学の授業が、テレビ・ラジオで送られる放送教材を中心に構成されているからである。

放送大学は自前の放送局を持ち、テレビジョン（UHF 第16チャンネル）とFM（FM77.1 MHz）の二つのメディアを通して、東京局（東京タワー）と前橋局から関東地方のかなり広範な地域に、教材としての放送が送られており、また受信可能な一部の地域（長野県諏訪湖周辺、山梨県甲府周辺）では、地元のCATVにより、放送大学の放送授業が提供されている。朝6時から夜12時まで、毎日18時間にわたる放送授業を提供しているような大学は、世界に例がない。

1980年代の世界の290の遠隔高等教育機関を比較調査した、西ドイツの遠隔大学のB.ホルムベルグは、その報告書の中で、“予期し難いことではなかったが、世界の遠隔高等教育では、依然として印刷教材が教材提示の主要なメディアとなっている”事実を指摘し、放送メディアの利用が、世界の遠隔高等教育の中では、少数に過ぎない現状を報告している。

現状でも、中国の中央広播電視大学や、アメリカのナショナル技術大学などのように、放送大学と同様に、放送を主教材としている機関もあるが、その形態は、職場での集団視聴が中心であり、放送大学の場合のような、家庭での学習を中心とする機関と、同日に論じ比較することはできない。

またこれらの他にも、幾つかの遠隔高等教育機関が、放送大学と同様に、教材提示に放送メディアを利用しているといわれるが、（先の報告書に寄れば、22の機関がなんらかの形で、放送メディアを通じて、テレビ・ラジオコースを提供しているという）、それらの多くは、ごく限られた時間や、教材提示の一部にすぎず、放送メディアを全面的に活用し、放送授業が教材の中心に位置付けられているのは、放送大学だけであるといつて差支えない。

本研究は、このような放送大学で、放送授業が学生達に期待通り利用されているかどうか、また教材としての放送授業が、どのように評価されるであろうかを、学生との直接面談を中心に、明らかにしようと試みたものである。

#### 〈調査の方法〉

放送大学の学生の学習状況の調査のためには、1人1人の学生の学習の現場に立ち合うことが必要であろうが、学生は基本的に在宅学習を中心とするため、現実にはそうした方法を取ることはできない。そのため、今回の調査では、学習センターでの面接授業の出席者の有志に直接面談する方式を取ることにした。

なお、調査に当っては、なるべく広い範囲から対象者が得られるよう、特定の科目にかたよらないような配慮とともに、諏訪地区学習センターを含む全ての学習センターの面接授業出席者を対象とした。

また調査の対象は、開学初年度（昭和60年度）第一学期登録学生を中心としたが、面接授業の登録の事情や当日の出席者の都合で、必ずしも昭和60年度第一学期登録の学生に限定されず、他の年度登録の学生も含まれた。

調査期間は、昭和62年度第一学期、第二学期及び昭和63年度第一学期の当該面接授業日の4回目か5回目（最終授業日）とした。これは、受講者の本音を引き出し、率直な意見や感想を得るには、面接授業担当講師と学生、あるいは学生同志の信頼関係が十分に深まっていることが、この種のグループ面談には必要と思われたからである。そのため、該当する面接授業担当講師の方々には、事前に調査の趣旨を説明し、学生への呼び掛けをお願いした。実際の面談は若松と田代が担当した。

#### 〈調査の内容〉

調査は、放送授業の利用の状況や利用の形態を中心とし、あわせて印刷教材の利用状況、学習効果、在宅学習の実態、レポートの作成状況、家庭環境、職場環境、単位認定試験の準備ならびに大学に望むことなど学習全般にわたった。

各調査項目の目的、内容やねらいを以下に示す。

- (1) 放送授業の利用の状況について；本調査の中心を占めるものであるが、在宅学習でのさまざまな利用の形態や、教材としての興味の深さや、講義に対する満足度、あるいはメディアの特性の活用に対する評価等
- (2) 印刷教材の利用；放送大学の学習は、放送教材と印刷教材との複合学習を基本とするが、通常の在宅学習の中で、放送教材との関係で印刷教材がいかに関与され、評価されているか
- (3) 学習効果；放送大学での学習が、どういう形で学生の生活や仕事の面で役に立っているのか、あるいは放送大学の学習システム等に対する満足度など
- (4) 在宅学習の実態；学生の通常の学習時間や学習環境についてなど
- (5) レポートの作成状況；各学期の中間に提出するレポートの準備の状況など
- (6) 学生の家庭環境；放送大学に学ぶことで、家族の者（妻、夫、子供等）へいかなるインパクトを与えたか、あるいは家族の者の学習者に対する協力の状況や、逆に非協力の場合には、家族の理解をどのように得る努力をしているか
- (7) 学生の職場環境；放送大学に在籍している事実を、職場の同僚や上司に話してあるか、話してない場合にはその理由を、さらに職場は学生の学習に便宜を計ってくれるか（学習センターでの面接授業の出席、単位認定試験への出席等）
- (8) 単位認定試験の準備；試験準備の状況について教材の利用との関係
- (9) 大学に望むこと；学習者の立場で、大学に対する要望等について、全般的な感想や意見
- (10) その他、一般的な意見感想等

## 〈調査の結果〉

### 1. 実施内容と面談出席者

面談出席者は、昭和62年度第一学期が42人、第二学期は36人、昭和63年度第一学期は58人、合計136人である。それぞれの年度の内訳を表1に、実施方法を表2に示す。

面談出席者136人中、昭和60年度登録の全科履修生は60人(44%)であるが、60年度登録学生は、他の調査でも明らかにされているように、放送大学の開学を期待を込めて待っていた学生層で、学習意欲に富み、単位の取得や学習継続も比較的良好な学生であるが、今回の調査でも、他の年度の学生と比較して積極的な発言が目立った。

面談出席者の平均年齢は、昭和62年度(男性43.9歳、女性44.2歳)、昭和63年度(男性46.8歳、女性42.7歳)とも比較的、放送大学の学生の中心的な層とも一致する。放送大学の学生調査の結果によれば(放送教育開発センター『第2回放送大学学生動態調査に基づく実証的研究』1987年)、今回の面談出席者の平均年齢層は、学習継続意欲が、他の年齢層と比較して高いレベルにあることが報告されている。この層が、学習センターの面接授業にも積極的に出席している学生であると考えられる。

したがって今回の面談出席者は、学習センターの面接授業に出席できる学習環境にある者であることを、確認しておく必要がある。

また今回の調査では、全体の93%(127人)が全科履修生であったが、先の調査でも、放送大学の学生層の中で、全科履修生の学習継続意欲の高さが指摘されているが、この点も考慮されるべきであろう。男女の比率は(52/48%)とほぼ半々であったが、資料に見る通り女性の大半は家庭の主婦であった。

先の調査で、放送大学の学生の他の学習機会の利用についても報告されているが、今回の面談者にもかって私大通信に学んだ経験を持つ女性や、他の学習機会を持つ女性が多かった。男性の場合には、比較的定年退職後の学生が多く見られるが、これらの学生は家庭の主婦と同様な学習環境にあると考えられる。

さらに、今回の面談に出席した学生の学習センターまでの所要時間は、平均1時間から1時間30分程度であり、この点も、先の調査によれば、放送大学の大半の学生と共通する

表1 面談出席者の内訳

|           | 昭和62年度の調査          |  | 昭和63年度の調査          |  |
|-----------|--------------------|--|--------------------|--|
| ①性別<br>年齢 | 男性 42人 (平均年齢43.9歳) |  | 男性 24人 (平均年齢46.8歳) |  |
|           | 女性 36人 (平均年齢44.2歳) |  | 女性 34人 (平均年齢42.7歳) |  |
| ②学生種類     | 全科履修生 70人          |  | 全科履修生 57人          |  |
|           | 選科履修生 5人           |  | 選科履修生 0人           |  |
|           | 特修生 3人             |  | 特修生 1人             |  |
| ③入学年度     | 昭和60年度 30人         |  | 昭和60年度 30人         |  |
|           | 昭和61年度 17人         |  | 昭和61年度 6人          |  |
|           | 昭和62年度 25人         |  | 昭和62年度 6人          |  |
|           | 昭和63年度 0人          |  | 昭和63年度 16人         |  |

表2 面談調査の実施方法\*

| 〈昭和62年度第1学期〉 |             |                |      |       |
|--------------|-------------|----------------|------|-------|
| 日            | 時           | 面接授業(担当教員)     | 面談場所 | 面談出席者 |
| 6/12(金)      | 15:15~17:30 | 世界史と時代意識(浜口)   | 東京第一 | 6     |
| 6/13(土)      | 14:00~15:00 | 現代の経済と経済分析(坂井) | 神奈川  | 4     |
|              | 17:00~18:00 | 経営管理II(横山)     | 群馬   | 4     |
| 6/19(金)      | 15:15~16:30 | 世界史と時代意識(浜口)   | 東京第一 | 4     |
| 6/20(土)      | 12:30~13:30 | 自然系実験(遠山)      | 東京第一 | 5     |
|              | 14:20~15:30 | フランス語I(井戸)     | 千葉   | 4     |
| 6/24(水)      | 15:00~17:00 | 住居I(本間)        | 東京第二 | 5     |
| 6/27(土)      | 12:30~14:00 | フランス語I(福井)     | 東京第二 | 5     |
| 7/4(土)       | 17:00~18:00 | 物質の科学I(渡部)     | 埼玉   | 5     |
| 〈昭和62年度第2学期〉 |             |                |      |       |
| 9/26(土)      | 17:00~18:00 | 経営管理II(横山)     | 埼玉   | 3     |
|              |             | 情報工学(塚越)       |      | 2     |
| 10/2(金)      | 15:30~16:45 | 世界史と時代意識(浜口)   | 東京第一 | 6     |
| 10/3(土)      | 17:00~18:00 | 物質の科学I(渡部)     | 埼玉   | 4     |
| 10/13(火)     | 17:00~18:00 | 中国語I(大塚)       | 千葉   | 3     |
| 10/17(土)     | 17:00~18:00 | 現代の経済と経済分析(坂井) | 神奈川  | 1     |
| 10/27(火)     | 15:30~17:00 | 住居I(本間)        | 東京第二 | 8     |
| 10/31(土)     | 12:00~14:00 | 自然系実験(若松)      | 東京第一 | 7     |
| 11/7(土)      | 12:30~13:30 | フランス語I(福井)     | 東京第二 | 2     |
| 〈昭和63年度第1学期〉 |             |                |      |       |
| 5/17(火)      | 17:00~18:00 | 都市計画(阪本)       | 埼玉   | 3     |
| 5/28(土)      | 15:15~17:00 | 経済学入門(坂井)      | 神奈川  | 10    |
| 6/3(金)       | 17:00~18:00 | 英語II-A(平賀)     | 千葉   | 1     |
| 6/4(土)       | 12:30~14:00 | 和文古典IV(清登)     | 埼玉   | 11    |
| 6/11(土)      | 12:30~14:00 | フランス語I(福井)     | 東京第二 | 8     |
| 6/14(火)      | 17:00~18:00 | 教育評価(大塚)       | 千葉   | 4     |
| 6/17(金)      | 15:15~16:45 | 世界史と時代意識(浜口)   | 東京第一 | 8     |
| 6/28(火)      | 15:15~16:45 | 住居I(本間)        | 東京第二 | 9     |
| 6/29(水)      | 17:00~18:00 | 学校教育(館)        | 東京第一 | 3     |
| 7/10(日)      | 13:00~14:00 | 面談のみ           | 諏訪地区 | 1     |

\*面接授業担当教員の方々に学生への事前の呼掛けをお願いした。実際の面談は若松と田代が担当した。

傾向である。また学習センターの利用という点では、今回の面談者は、単に面接授業への出席という面でのみ、学習センターを利用するのではなく、再視聴ルームや図書の利用、あるいは学習サークルやスポーツサークルへの参加等、実に多彩な利用をしている学生が多かった。逆に男性の学生の中には、面接授業に出席することだけで一杯で、他の目的のために、学習センターを利用したくても利用出来ない例も見られた。

また若年層には、連日学習センターに通い、恒常的に学習センターの諸施設を利用し、他の学生との交流に積極的な学生も見受けられた。

全体として今回の面談者には、先に示したような学習意欲の高い層への多少の偏りがあることは否めないが、一般的な放送大学の学生の属性と共通する一面を持ち、調査対象集団として、それなりの意味を持つものと思われる。

以下、項目別の調査結果を記す。

### 1. 放送授業の利用の形態

表3 放送授業の利用の形態（数字は回答数）

|                     |          |
|---------------------|----------|
| A. 放送授業の視聴と録画       | 136      |
| ・視聴している             | 131      |
| ・視聴しない              | 3        |
| ・その他                | 2        |
| ①放送時間に視聴する          | 53 (40%) |
| ・視聴と同時に録画する         | 15       |
| ・場合により録画する          | 26       |
| ・録画しない              | 11       |
| ②放送時間には録画だけである      | 65 (50%) |
| ・週末にまとめて視聴する        | 14       |
| ・当日視聴する             | 13       |
| ・翌週迄に視聴する           | 10       |
| ・余裕のある時に視聴する        | 10       |
| ・適宜繰り返し視聴する         | 5        |
| ・試験1週間前に視聴する        | 3        |
| ・前学期中に録画する          | 2        |
| ・その他                | 8        |
| ③放送授業の利用は視聴学習室のみである | 14 (10%) |
| B. 録画録音の保存          | 103      |
| ①保存しない              | 21 (30%) |
| ②保存する               | 82 (70%) |
| ・試験まで               |          |
| ・学期間                |          |
| ・単位取得まで             |          |
| ・TV授業をオーディオで保存      |          |
| ・その他                |          |

放送授業の利用の形態（表3）についてみると、A. 放送授業の視聴と録画については、放送授業を視聴していると回答するもの（136人中、131人）のうち、52人（40%）の学生は放送時に視聴し、残りの79人（60%）は、リアルタイムには視聴していないことがわかった。

また放送時に視聴するもののうち、視聴と同時に録画するものは15人（29%）、時々録画

するものは26人（50%）、録画はしないと回答するのは11人（21%）であった。

放送時間には録画だけと回答するのは65人（50%）であり、そのうち録画当日に視聴するものは13人（20%）に過ぎない。残りは何らかの形で当日以外の時間に視聴している。

また B. 録音録画の保存については、回答103人中、21人（30%）は視聴の都度消したり、残さないように努力すると回答し、残りは一定期間テープを保存している状況がわかる。

さらに14人（10%）の学生は、放送授業の視聴はもっぱら再視聴ルームでと回答しているが、このうち週日に利用する男性3人は、いわゆる学令期の無職の若者で、常時学習センターを利用する学生であった。

## 2. 印刷教材の利用の状況

表4 印刷教材の利用の状況（回答数 92）

|                           |         |
|---------------------------|---------|
| ①学習は主に印刷教材の反復読書が中心である     | 18(19%) |
| ・印刷教材を見ながら視聴し、書き込む        | 8       |
| ・放送授業より学習し易いから            | 4       |
| ・学習時間は通勤時のみだから            | 6       |
| ②印刷教材を見ながら視聴し、書き込む        | 38(41%) |
| ③視聴前に印刷教材を読み放送授業に臨む       | 18(20%) |
| ④印刷教材は主として復讐に利用する         | 7( 8%)  |
| ⑤印刷教材はあまり利用しない（放送教材の方が有効） | 7( 8%)  |
| ⑥その他                      | 4( 4%)  |

本来放送大学の学習は、放送授業を視聴することと、印刷教材による学習とを併せ行うものであるが、印刷教材の利用の状況は、表4に示されるように、5分の1に当たる18人が印刷教材中心型の学習スタイルを取っており、これらの学生にとっては、教材としての放送授業はあまり効果がないと評価されている。

放送授業と印刷教材との関係については、「最も望ましい放送教材と印刷教材の関係を選んで下さい」との調査（放送教育開発センター『放送大学教材についての学生調査』昭和62年9月～10月、回答者数1,550人）では印刷教材を主教材とし、放送教材を補助教材とするものが50%を占めるが、今回の調査でも、全体の過半数の②③に集約される回答が、同じ基調にあるものと思われる。これらに①を加えると、全体の80%は、印刷教材中心の学習をおこなっていることがわかる。

さらに、印刷教材と放送教材との複合的学習の実態については、印刷教材を見ながら視聴し、印刷教材には記載されていない内容を余白に書き込み、または別のノートやメモに記録する、というのが代表的な形であることも、今回の調査から明らかになった。

これらの調査結果から、学習者にとり放送授業は、教材というよりも学習の動機づけや、学習のペースメーカーとして、活用されているものと考えられる。このような事情は、学期末の単位認定試験の準備に、より明確な形で表れている。

## 3. 単位認定試験の準備状況

単位認定試験の準備状況を表5にまとめた。放送教材を中心に準備すると回答したもの

表5 単位認定試験の準備状況（回答数 126）

|                  |         |
|------------------|---------|
| ①印刷教材中心          | 49(39%) |
| ②印刷教材+学習ノート、メモ   | 36(29%) |
| ③印刷教材+放送授業見直し    | 24(19%) |
| ④放送授業中心          | 8(6%)   |
| ⑤放送授業+学習ノート      | 5(4%)   |
| ⑥放送授業+印刷教材+学習ノート | 4(3%)   |

(④⑤⑥に集約される)は少数(13%)で、大勢(87%)は①②③に示される印刷教材を中心とした試験準備であることがわかる。

以上のように、放送大学の学生の学習スタイルの一般的な形態は、テレビ・ラジオを通じて送られる放送教材を、あるものはオンタイムで、あるいはビデオに収録して視聴することにより、学習の動機づけや、学習のペースメーカーとして活用し、本来の意味での学習や、学期末の単位認定試験の準備には、印刷教材が中心となっているらしいことが明らかになった。

#### 4. 放送授業の学習効果について

表6 放送授業の学習効果について（回答数 44）

|  |         |
|--|---------|
| ①メディアや科目の特性を生かした授業は説得力があり興味を引き出してくれる       | 15(34%) |
| ②放送授業は学習の動機づけやペースメーカーとして有効である              | 10(23%) |
| ③放送授業を通じて講師への親近感や信頼感が深まり触れ合い的效果が大きい        | 8(18%)  |
| ④放送授業は印刷教材の理解に役立つ                          | 2(4.5%) |
| ⑤印刷教材と内容が同じであったり平板な放送授業は興ざめであり、かえって孤独感が深まる | 5(11%)  |
| ⑥その他                                       | 4(9%)   |

放送大学の放送授業が、学習を進める上で、実際にどのような役割を果たして来ているのかを、さらに明らかにする目的で、昭和62年度第二学期の調査期間中、とくに『住居I』と『自然系実験』の面接授業受講者を対象に、この点に問題を集中して面談を試みた。面談出席者は合わせて15人であったが、受講者は全員異口同音に放送授業を評価した。生の声を次に列記する。

- ・放送授業は、印刷教材を理解する上で役に立つ
- ・放送授業はふくらみがあり、興味を引き出してくれる
- ・印刷教材を見ると難しいが、放送授業は身近に感じる
- ・無ければ困る、印刷教材だけではやる気がしない
- ・顔を見ることが出来、安心出来る、画像や音声を通じて講師の人柄や人間性を感じ取られ、一対一で講義を受けているような気になる
- ・放送授業は説得力がある



・放送授業は親近感がある

また昭和63年度の調査における放送授業の評価については、表6のように集約された。受講者の放送授業に対する生の声（昭和62年度）や、評価の集約の状況（昭和63年度）から、放送授業が機能している状況を確認することができる。

先の項目で触れたように、印刷教材との関係では放送教材は副次的な評価にとどまる傾向がみられたが、いわゆる学習の動機づけやペースメーカーとしては高く評価されている。反面、放送教材が印刷教材の理解に有効であるという評価がきわめて低い（昭和63年度の調査で4.5%）ことは注目に値する。

メディアの特性を生かした授業が、興味を引き出したり、興味を拡大してくれるものとして評価が高く、同時に放送授業には講師との触れ合いによる、心理的な満足感や安心感があり有効であるという意見は、放送授業それ自体は、体系的な知識の伝達や、種々の概念を論理的に説明したり、あるいは抽象的レベルで文節化したり統合化したりするには、おのずから限界があることを示しているように思われる。

このことは、メタ情報としての基本的な知識を持たないものにとって、情報の適切な利用は困難ではないかということの意味する。

事実、昭和63年度の面談者の放送授業の評価については、概して高学歴者の評価が高く、短大卒以上の14人（男性7、女性7）のうち11人は、放送授業を積極的に評価している。

基礎的学力があり、ある程度体系的な知識を修得している受講者にとっては、教材としての放送授業の活用が十分にできていることを示唆するものである。

こうした事情とは別に、教育情報の伝達という面で、一過性の放送教材にはある種の限界があることも否定できない。

放送授業があくまで教材であり得るためには、体系的、概念的である知識を、情報としていかに放送メディアに乗せ得るかという、古くて新しい問題の解決を迫られるといえるであろう。

#### 5. 家族環境について

面談対象者の家族環境は、表7にみられるように、60%強（①②③）が協力的で問題ないと回答している。今回の面談対象者に主婦が多かった事情を反映し、主婦特有の状況が⑤⑥⑦に集中しているのが目立っている。

表7 家族環境について（回答数 120）

|                        |         |
|------------------------|---------|
| ①家族が協力的である             | 36(30%) |
| ②学生として学ぶ姿が家族にインパクトを与えた | 6(5%)   |
| ③取り立てて問題はない            | 31(26%) |
| ④家族が無関心である             | 16(13%) |
| ⑤家事と両立するように努力している      | 13(11%) |
| ⑥家族サービス等で家族に負担を与えている   | 8(7%)   |
| ⑦主人が冷やかである             | 5(4%)   |
| ⑧四面楚歌である               | 1       |
| ⑨その他                   | 4(3%)   |

また今回の調査中に、男性の多くは、専用の書斎や勉強部屋を持っているのに対し、女性の場合には、居間や台所、あるいは家事室の一隅を、勉強部屋として確保できる程度で、家族の理解や協力を得ながら、主婦に特有の問題をかかえる中で、それを克服しながら学習する状況が、かいま見られた。

またとくに昭和60年度登録学生には、夫婦そろって放送大学生という、恵まれた家族環境にある例が、今回の調査でも比較的多く見受けられた。

## 6. 職場環境について

表8 職場環境について (回答数 80)

|                                 |         |
|---------------------------------|---------|
| ①問題はない                          | 16(19%) |
| 自営業5、自由業2、アルバイト3、在宅勤務3、関係ない1 など |         |
| ②理解が得られている                      | 15(18%) |
| ・会社も自己啓発を奨励している                 | 3       |
| ・上司や同僚も学生登録をした                  | 2       |
| ・職場では学生であることをオープンにしている          | 7       |
| ・休み時間にビデオの利用に便宜を計るなど理解がある       | 3       |
| ③仕事との両立は可能である                   | 10(12%) |
| 通訳1、看護婦6、パート3                   |         |
| ④仕事との両立は難しい                     | 7(8%)   |
| ・仕事との両立は大変である                   | 1       |
| ・実績で示す以外にない                     | 2       |
| ・つき合いが悪くなったといわれる                | 4       |
| ⑤職場には内緒である                      | 36(43%) |
| ・試験の時休暇を取るため上司にだけ話してある          | 12      |
| ・積極的には話していない                    | 8       |

今回の面談調査の中で、もっとも衝撃的だったのは、この職場環境についての調査の結果である。実に回答数80人中36人(43%)が、放送大学の学生であることを、それぞれの職場で内緒にしているのである。表8から明らかなように、フルタイムの職業人が、少数の例外を除き、このような状況にある事実は、放送大学にとってきわめて重いものと言わざるを得ない。

放送大学の学生であることを、職場には内緒にしている理由について

- ・仕事で手を抜いていると思われたくない
- ・若い人達が放送大学を軽蔑する
- ・大学の勉強をしていると言える程の自信が無い
- ・放送大学の世間での評価が定まっていないから

なおこの項目については、男女間や学習センター間で、相違が認められた。女性の場合には、放送大学に学ぶことを、自分の周りに積極的に話すのに対し、男性の場合には、せいぜい直属の上司にしか、話していないのが現状で、それも単位認定試験を受けるに当り、止むをえず上司に話しておくといった程度で、積極的に話すものではない。職場には知られたくない理由を、生の声のままここに示したが、これらの理由の他に、職場の学歴主義

から、同僚に対し、大卒ではなかったという事実を、知られたくないという、心理的なためらいもあるのかも知れない。職場には内緒にしておくという意識が、東京第一、東京第二学習センターの面談出席者にとくに顕著であり、群馬や千葉の学習センターの面談者では、比較的稀薄であったが、職場での学歴意識に地域差がみられるからであろうか。

女性の場合は、今回の面談者に主婦が多かったが、放送大学に学ぶことに対する、心理的な引け目はほとんどなく、むしろ、放送大学を“試験のあるカルチャーセンター”として受け入れて、楽しみながら学習をしている一面も感じられた。

いずれにしろ、放送大学に学ぶことをひた隠しにする状況は、決して健全な姿とはいえない。学生の心理的な防御意識はともかく、放送大学の学生であることを誇りを持って語り得るには、それこそ放送大学自体が、世間に対し「実績で示す以外にない」であろう、と思われる。

### 〈学習状況と修得単位数〉

本調査の主な目的である、放送授業の利用の形態など在宅の学習状況が、学習の達成度にどのような影響を与えているのか、を明らかにするために、学習の達成度を示す一つの尺度として、修得単位数を取り上げ、昭和62年度の面談出席者について調査をおこなった。

調査の目的から、対象者は昭和60年度第一学期入学の全科履修生（36人）とし、昭和62年度（3年次）第2学期現在（調査時点、昭和63年2月3日）の修得単位数について、3つのグループに分類整理したものを表9にまとめた。

ここでAグループは85単位以上、Cグループは45単位以下、Bグループはその中間で、3グループともに、修得単位数の多い順に整理した。

各グループの特性を比較したものが表11である。Aグループは、每学期平均10単位程度の単位を修得しており、4年間の在学で卒業できる可能性をもつグループであるが、このAグループ12人の特性は、先ず男女比で1：2と女性が主であることである。平均年齢は男性が34歳、女性47歳で、女性については、年齢的に一応子育ても終り、家庭にあって時間的にも余裕があり、社会参加や教育活動に熱心な世代の専業主婦が多い。男性は、全員がフルタイムの職業をもっているが、その内2人は、勤務時間が比較的一定している公務員であり、会社員の他の2人も年齢的に中堅幹部の一步手前の世代で、自己啓発にある程度の時間を割くことが可能な学生と思われる。このようにみると、Aグループに共通する特性の1つとして、学習時間に比較的恵まれた環境にあることが浮かび上がってくる。

またこのグループに属する次の特性に、学歴を挙げることができる。80%以上が高等学校卒業であり、大学卒業資格をめざして、学習意欲に満ちて学習を継続しているグループである。

次に学習継続は出来ているが、学習の達成度の面で、単位取得が必ずしも順調とはいえないCグループについては、他のグループと比較して、人数が少なく一般化しにくいだが、まず男性について見ると、年齢的に会社の中堅幹部層で日々仕事に追われ、おそらくは十分な学習時間を確保出来ないが、特定の知的好奇心を持ちながら、関連した講義の登録を継続している人達であろう。

表9 A、Cグループの修得単位数と放送授業の利用状況

調査対象者：昭和60年度第1学期入学者（36人）

|       |                  |           |
|-------|------------------|-----------|
| Aグループ | 12 (33%) (男4、女8) | 修得単位数85以上 |
| Bグループ | 17 (47%) (男9、女8) | 46以上85未満  |
| Cグループ | 7 (19%) (男4、女3)  | 45以下      |

(昭和63年2月3日現在)

●Aグループ（昭和60年度第1学期入学全科履修生で修得単位数85以上）

| 単位数 | 性別 | 年齢 | 専攻 | 学歴  | 職業    | 放送授業の利用状況           |
|-----|----|----|----|-----|-------|---------------------|
| 110 | 女  | 36 | 自  | 高校卒 | 無職    | 同時録画*し、試験まで保存する。    |
| 107 | 男  | 41 | 生  | 高校卒 | 会社員   | 録画して保存する。           |
| 106 | 女  | 67 | 生  | 高校卒 | 無職    | TV、Rとも音声のみ同時録画する。   |
| 97  | 女  | 55 | 人  | 高校卒 | 会社員** | 視聴学習室でのみ（自宅では視聴しない） |
| 95  | 女  | 25 | 人  | 高校卒 | 会社員** | 同時録画し、試験まで保存する。     |
| 92  | 女  | 55 | 人  | 高校卒 | 無職    | 録画し、当日視聴する。残さない。    |
| 91  | 女  | 46 | 自  | 高校卒 | 無職    | 不明                  |
| 90  | 男  | 37 | 社  | 高校卒 | 会社員   | 同時録画し保存する。          |
| 90  | 男  | 28 | 自  | 高校卒 | 公務員   | 録画して週末に視聴し試験まで保存する。 |
| 89  | 男  | 31 | 自  | 短大卒 | 公務員   | 録画し翌週までに視聴し学期中保存する。 |
| 88  | 女  | 43 | 生  | 高校卒 | 無職    | 放送時に視聴する。語学のみ録画する。  |
| 87  | 女  | 50 | 人  | 高校卒 | 無職    | 同時録画し学期中保存する。       |

(\*放送時に視聴し同時に録画する。)

(\*\*パートタイマー)

●Cグループ（昭和60年度第1学期入学全科履修生で修得単位数45以下）

| 単位数 | 性別 | 年齢 | 専攻 | 学歴  | 職業  | 放送授業の利用状況            |
|-----|----|----|----|-----|-----|----------------------|
| 45  | 女  | 52 | 人  | 高校卒 | 公務員 | 録画しない。放送時に視聴できる科目を選択 |
| 45  | 男  | 23 | 発  | 高校卒 | 無職  | 録画し当日か週末に視聴する。       |
| 43  | 女  | 54 | 人  | 短大卒 | 公務員 | 録画し当日視聴を原則とする。       |
| 43  | 男  | 36 | 産  | 大学卒 | 会社員 | 録画し当日視聴を原則とする。       |
| 41  | 男  | 63 | 人  | 大学卒 | 無職  | 録画し当日視聴を原則とする。       |
| 37  | 女  | 24 | 自  | 大学卒 | 無職  | 録画（録音）するが見ないことが多い。   |
| 24  | 男  | 58 | 人  | 高校卒 | 会社員 | 視聴学習室でのみ視聴する。        |

(専攻 生：生活と福祉 産：産業と技術 発：発達と教育 人：人間の探究 社：経済と社会  
自：自然の理解)

表10 Bグループの修得単位数と放送授業の利用状況

●Bグループ（昭和60年度第1学期入学全科履修生で修得単位数85以上）

| 単位数 | 性別 | 年齢 | 専攻 | 学歴  | 職業  | 放送授業の利用状況             |
|-----|----|----|----|-----|-----|-----------------------|
| 83  | 男  | 45 | 社  | 高校卒 | 会社員 | 録画*する。放送授業は理解に役立つ。    |
| 83  | 女  | 36 | 発  | 短大卒 | 無職  | 放送時に視聴し、録画はしない。       |
| 81  | 女  | 41 | 生  | 短大卒 | 会社員 | 録画し、夜間まとめて視聴する。       |
| 79  | 男  | 48 | 産  | 高校卒 | 公務員 | 録画し翌週までに視聴しそのまま保存する。  |
| 78  | 女  | 42 | 発  | 短大卒 | 無職  | 録画し見逃したら視聴学習室を利用する。   |
| 74  | 男  | 51 | 社  | 高校卒 | 会社員 | 録画し休日にまとめて視聴試験まで保存する。 |
| 73  | 男  | 40 | 社  | 高校卒 | その他 | 録画し翌週までに視聴し残さない。      |
| 70  | 女  | 37 | 発  | 短大卒 | 公務員 | 録画し単位取得後も面白いものは保存する。  |
| 66  | 男  | 66 | 発  | 高校卒 | 会社員 | 録画するが視聴は半分。試験まで保存する。  |
| 66  | 女  | 54 | 生  | 短大卒 | 自由業 | 録画する（当学期中に次学期分を）。     |
| 63  | 男  | 23 | 発  | 高校卒 | 無職  | 録画し保存する。繰り返し見直す。      |
| 63  | 女  | 52 | 人  | 高校卒 | 無職  | 録画しない。放送時視聴を原則とする。    |
| 62  | 女  | 45 | 発  | 高校卒 | 無職  | 録画し単位取得まで保存する。        |
| 58  | 男  | 32 | 人  | 高校卒 | 会社員 | 半分程度録画し他は視聴学習室を利用する。  |
| 57  | 男  | 62 | 産  | 短大卒 | 会社員 | 録画し試験1週間前に視聴する。       |
| 56  | 男  | 42 | 自  | 高校卒 | 会社員 | 録画し週末にまとめて視聴する。残さない。  |
| 54  | 女  | 53 | 生  | 高校卒 | 無職  | 同時録画し原則として残さない。       |

(\* 放送時には視聴しないで録画する。専攻略称は表9を参照)

表11 各グループの特性の比較

| (1)性別 | [A]           | [B]           | [C]           |
|-------|---------------|---------------|---------------|
| 男     | 4 (33%) <34歳> | 9 (53%) <45歳> | 4 (57%) <45歳> |
| 女     | 8 (67%) <47歳> | 8 (47%) <45歳> | 3 (43%) <43歳> |
| (2)職業 | [A]           | [B]           | [C]           |
| 公務員   | 2 (17%)       | 2 (12%)       | 2 (29%)       |
| 会社員   | 2 (17%)       | 7 (41%)       | 2 (29%)       |
| 個人営業  |               |               |               |
| 自由業   |               | 1             | 1             |
| 無職    | 8 (67%)       | 6 (65%)       | 2 (29%)       |
| その他   |               | 1             |               |
| (3)   | [A]           | [B]           | [C]           |
| 高校    | 10 (83%)      | 11 (65%)      | 3 (43%)       |
| 大学・短大 | 2 (17%)       | 6 (35%)       | 4 (57%)       |

女性については、学習環境の変化（本人の病気、家族の病気、あるいは家族の転勤等）に伴い、学習継続の意欲は強いが、学習の達成度が低くなっている人達である。

Cグループの顕著な特性は学歴に見られる。このグループでは、短期大学以上の学歴をもつ人の比率はAグループの5.7倍である。Aグループと比較し、学習の目標設定や動機づけ、あるいは学習意欲の面で、高学歴が阻害要因になっているのであろうか。

これらの特性をふまえて、本調査の中心となった放送授業の利用の形態について、各グ

ループの状況を比較する。表9のAグループをみて気がつくことは、放送授業を放送時に視聴し、同時に録画しておく形態が多く、半数を占めることである。既述のようにこのグループでは、大学卒業資格を得る学習の目標が明確に設定されており、学習時間に恵まれた環境にあって、オンタイムの放送授業が、学習のペースメーカーとしてもよく機能しているものと思われる。この点に関して、Aグループの女性の一人は、かつて私大通信に学んだ経験から、放送授業をオンタイムに視聴することが、学習のペースを掴み学習の自己管理に極めて有効であるという感想を漏らしている。

Aグループに対比して、Cグループの放送授業の利用形態は、オンタイムの視聴がなく、録画（音）をするが、総じて放送授業への取り組みが十分とはいえない状況がうかがわれる。

放送授業が、知的好奇心を充足するものとして、高学歴者の評価は高いが、それが必ずしも学習のペースメーカーとなっていない状況を、Cグループから読み取ることができよう。

中間のBグループは、性別、年齢、職業、学歴などの特性が、放送大学学生の全体像に近く、特徴を見出しにくい、放送授業を録画して視聴し、オンタイムに視聴するものがほとんどいない（17人中1人だけが同時録画をしている）点が、Aグループと異なることに注目すべきであろう。しかし他の調査や面談を直接担当した報告者の印象からは、このBグループは、それぞれのライフスタイルに応じた速度で、学習が継続出来ている、ごく一般的な放送大学の学生像を示しているのではないと思われる。

#### 〈おわりに〉

昭和62年度から2年間にわたる本調査を通じて、放送授業が予想以上によく利用されていることがわかった。とくに面談者全体の半数に近い約40%は、放送授業をオンタイムに視聴していることに注目したい。昭和62年度の調査で、放送大学の開学年度(昭和60年度)第1学期に入学した学生については、授業をオンタイムに視聴し、同時に録画して繰り返し利用する場合の、継続や学習の達成度が高い傾向が認められた。オンタイムに視聴する傾向は、昭和63年度の調査においても、基調は変わっていない。オンタイムに視聴すると回答した学生23人のうち12人（52%）は、昭和60年度入学の学生であるが、昭和63年度入学の学生についても、16人のうち8人（50%）がオンタイムに視聴すると回答している。このことは、放送大学における学習パターンが定着しはじめたとも考えられるが、調査を継続する必要がある。

また放送授業の評価については、学生が画像での教師との「触れ合い」によって、心理的な満足感や安心感を覚えると同時に、学習の動機づけや学習のペースメーカーとして、有効に機能していることが明らかになった。

(研究開発部教授、研究開発部助教授)